

カボチャ新品種

「つきみ」の特性と栽培の要点

雪印種苗株式会社  
園芸作物研究グループ  
野菜研究チーム  
広瀬 慶多

4



▲写真1  
貯蔵後には果肉が鮮やかなオレンジ色に、さらに肉厚でカット断面良好

やすい冬至出荷向けの白皮種です。

2.「つきみ」の特性概要

①草勢および着果性

草勢は強く旺盛で、側枝の発生も多く見られます。葉は大きく葉柄も長いですが、風による葉折れはほとんどありません。雌花はやや低節位

から多く着生します。着果は安定して良好で、1株あたりの着果数が多い傾向にあります。果実の完熟には開花後45日程度を要します。

②果実の特性

果皮は灰白色でリブは浅め、ちらし斑や条斑は目立ちません。果形はやや甲高の偏円形で果重は1.8~2.0kg程度と5~6玉中心の中大果に揃います。

収穫直後の果肉色は淡い黄色ですが、貯蔵後にはオレンジ系の濃黄色となります。果肉が厚いため可食部位が多く、果肉色と相まってカット販売での見栄えが良好です(写真1)。

肉質は極粉質系で、貯蔵後は甘みが強くなり食味が良好です。貯蔵中の腐敗が少なく貯蔵性に優れます。

3.栽培のポイント

①適作型

各地域に適した播種・定植期と予想収穫期は別表の通りです(表1)。草勢が強いため安定栽培には露地栽培が適しています。北海道等の冬至出荷向け栽培はやや遅めの播種とします。

②育苗管理

カボチャは本葉展開時から花芽が分化し始めますので育苗中の管理が着果性に影響します。露地栽培では育苗期間に夜温をできるだけ低く管理することが安定着果の重要なポイントです。育苗は10.5~12cmポットを使用し、育苗中の肥料切れに注意します。

種子の表面はざらざらで吸水力は強い傾向がありますので、水分過多にならないように注意します。発芽適温(25~28℃)では3~4日で発芽が揃いますが、低温下では7日以上かかることがあり、腐敗による不発芽や生育不揃いとなりやすいので保温資材を利用して地温を確保して齊一に発芽させます。

本葉が展開を始め、葉がせり合うようになったら、ずらし作業をおこない苗の徒長を防ぎ、定植5日前には日中に外気にあてて慣らして植え傷みを防ぎます。

1.はじめに

冬至用としてスーパーなどの店頭で販売されているカボチャにはメキシコ産などの輸入品が多く見られます。カボチャの大生産地である北海道では主に8~9月に収穫されるため、冬至に出荷するには長期間の保管が必要です。さらにカボチャは低温障害がしやすい野菜ですから長期保管には温湿度が管理できる貯蔵庫が必要であり簡単ではありません。貯蔵技術の向上も進んでいますが、冬至に安定した出荷を実現するためには栽培する品種にも高い貯蔵性が求められます。一般的に黒皮系の品種と比較して貯蔵性が高いと言われているのが白皮系の品種です。白皮系の品種はデンプンを非常に多く蓄えるために、特に草勢が強いのも特徴です。こういった草勢の強い品種は着果が不安定で果揃いが悪くなりやすい傾向があります。弊社は着果が安定する白皮系品種の開発を進めて参り、この度「つきみ」を発表いたしました。「つきみ」はその安定した着果性と果揃いの良さが特徴で、大きくなり過ぎないことからカット販売以外にも直売所などでも扱い

▼表1 「つきみ」の適作型

栽培作型		●○: 播種期 ▲: 定植期 ■: 収穫期								
地域	作型	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	
北海道 東北 高冷地	露地			●○	▲					
				●○	▲			■		
一般地 暖地	露地	●○	▲							
		●○	▲				■			

近年はプラグ苗などの若苗移植や直播での栽培が増加しています。一般的には樹があばれやすく、着果が不安定で低収になりやすいと言われています。本品種は特性的に着果が不安定になりにくい傾向がありますが、良品生産のため若苗での移植や直播での栽培の際には元肥の多用を避けた方が望ましいです。



▲写真2 着果が良好で、連続的な着果も見られる「つきみ」

### ③圃場準備と定植

一般的に草勢が劣ると変形果や小果の原因となりますが、草勢が強すぎる(あばれる)と着果不良の原因となり、側枝や葉柄が果実に触れやすくなることによってつる傷の発生も多くなります。本品種は草勢が強いため、多肥による過繁茂に注意してください。各地の施肥標準よりも元肥をやや減肥とし、窒素はカリとともに分施とします(表2)。開花期以降の肥料効きが特に重要なため、追肥管理が困難な場合は圃場に完熟堆肥など有機物を十分に投入し、ロングなど緩効性肥料を用いた肥料設計とします。

定植の1週間前には元肥を施用し、マルチ被覆をおこないます。地温が上がり過ぎると雌花着生が不良となるので、高温期はシルバーなどの有色マルチが有効です。

整枝方法は子つる2本仕立てを基本とし、畝間は3.0~3.5m、株間は70cm程度とします(408~476株/10a)。老化苗とならないように本葉3.5~4枚程度(育苗期間25~30日程度)で定植します。圃場が乾燥している時は定植後に灌水をおこなって活着を促進させます。

### ④つる管理

摘心後は生育の揃ったつるを残すように剪定し、つるの生育に合わせて誘引します。つる傷防止のために着果節位までの側枝は早めに除去し、着果節位以降の側枝については特性的に放任でもかまいません。低節位の雌

花は摘花し、10節位以降に着果させると収量が安定します(写真2)。

▼表2 「つきみ」の施肥例(kg/10a)

作型	元肥			追肥
	窒素	リン酸	リン	NK化成肥料
露地マルチ	6~7	16~20	10~12	窒素、カリ 3~4

### ⑤病虫害防除

着果後は樹への負担が大きく、気候的にもウドンコ病が発生しやすい時期となります。降雨後の高温で急速に拡大することがあるので雨前散布を中心に定期的な殺菌剤の散布をおこなって収穫期まで樹勢を維持します。ウイルス病を伝播するアブラムシ対策に殺虫剤も併せて散布します。近年は斑点細菌病など細菌病の被害が増加しています。細菌病の防除は予防が基本となるので、開花期前から定期的に銅剤の散布をおこないます。

### ⑥追肥

追肥は着果確認後に果実を大きく肥大させるための肥料として、つる先部分にNK化成肥料を施用します。このころには根は広く発達しているため、株元に施用するよりも効率よく肥料分が吸収されます。茎葉が繁茂して畑に入るのが困難になってしまった場合は、薬剤散布に併せて液肥や尿素の葉面散布で対応します。粒状肥料と比べて肥効が短いので、草勢に併せて複数回散布します。

### ⑦その他の管理

グラウンドマーク防止、疫病などの果敗果防止には、フルーツマットを敷いて果実が直接地面に触れないようにすることが有効です。着果後すぐに触れると果皮

が有効です。着果後すぐに触れると果皮が傷つきやすいので、14~20日程度してからマットを敷きます。収穫までに日焼けが懸念される場合は新聞紙で果実を包んで直接日があたらないようにします。

### ⑧収穫

収穫の目安は開花後40~45日ですが着果状況や草勢次第で前後します。果梗部を確認して、全体にコルク化が進んだ完熟果を収穫します。未熟なうちは果皮色には緑色が残り、完熟となると白みを帯びてきます。緑色が強く残る果実は未熟果のおそれがありますので混入しないように注意します。収穫の際は柱頭が傷つかないように優しく取り扱い、切り口が乾いてから詰込み、収納してください。また貯蔵中の腐敗の原因となるため切り口から流れる水が果実につかないように注意します。

### ⑨キュアリングおよび貯蔵

収穫後は風通しのよい納屋か直射日光を避けたハウスに移し、10~14日程度キュアリング(風乾)します。キュアリングすると収穫時のすり傷などが乾燥して貯蔵性が向上します。キュアリング後は温湿度が管理できる貯蔵庫などで貯蔵して追熟させます。追熟するとデンプンが糖化して甘味が増すほか、果肉色も濃く鮮やかなオレンジ色となります。本品種は粉質が非常に強く、収穫直後は甘味が少なく感じますので30日以上追熟させてからの出荷とします。

## 4. おわりに

以上、新品種『つきみ』の特性と栽培のポイントについて紹介いたしました。本品種は着果が安定して作りやすいため、直売所向けや家庭菜園での栽培でも扱いやすい品種です。是非一度お試しください。

弊社は他にもカボチャ品種のラインナップを揃えております。『つきみ』ともども雪印のカボチャを今後ともよろしくお願ひいたします。